

元諏訪神社のハルニレ群

(もとすわじんじやのはるにれぐん)

天童市東芳賀二丁目5

ハルニレは、昔「タモ」と呼ばれ、丸太を彫りぬいて舟を作ったり、内皮で織物を織ったり、外皮で屋根を葺いたりするなど、人々の生活と深く関りを持っていた。また、擦りだして火を起こす木として使われたことから、神聖な神の木としても崇められていた。さらにハルニレの生育する場所は一等地とされ、新しく開拓する時などの大切な環境指標となった木である。

この元諏訪神社境内にある目通し幹回り2.57m、2.52m、2.41m、2.34mの四本のハルニレは、樹木の生育状況から、この地域一帯に自然に生えていたハルニレが、神社境内によって保護されて、ここだけに残ったものと思われ、平成10年9月1日に市指定天然記念物に指定されている。
〔山形県森林協会〕

(案内略図)



元諏訪神社のハルニレ群

元諏訪神社のハルニレは各地の杉の幹まきによってあり、また、当時の自然環境を伝える上で極めて貴重な樹木である。

ハルニレは昔「タモ」と呼ばれ、丸太を彫りぬいて舟を作ったり、内皮で舟を作ったり、外皮で織物を織ったりするなど、人々の生活と深く関わりを持っていた。また、擦りだして火を起こす木として使われたことから、神聖な神の木としても崇められていた。さらにハルニレの生育する場所は一等地とされ、新しく開拓する時などの大切な環境指標となった木である。大樹は環境指標にもなった木である。現在では神社、仏教、公園など様々な場面で利用されている。

この元諏訪神社境内にある、目通し幹まわり2.57メートル、2.52メートル、2.41メートル、2.34メートルの四本のハルニレは、樹木の生育状況から、この地域一帯に自然に生えていたハルニレが、神社境内によって保護されて、ここだけに残ったものと思われる。高樹の幹まわりは「高樹」で「タカグサ」と呼ばれていた。それは江戸時代の高樹「タカグサ」になり、現在は「高樹」「タカグサ」に変わった。高樹の「高樹」「タカグサ」の由来は、「タモ」と呼ばれたこの「ハルニレ」からである。

【森林やまがた114号(2008年3月)記載】